

薫宰相の宇治訪問

加藤 義彦

『源氏物語』続編の主人公薫は、光源氏から冷泉院に身の上を託され、冷泉院から「明け暮れ御前に召しまつはしつづ、げに、ただ昔の光る源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おほえなり」(河・九二頁)という寵を受け、元服した十四歳の春に侍従、同年秋に右近中将、十九歳で中将のまま参議となり、光源氏のような昇進を遂げる。しかし、薫は、光源氏が去って「闇にまどふ」(紅梅・四九頁)世に、「闇はあやなく心もとなきほどなれど、香にこそげに似たるものなかりけれ」(匂兵部卿・三四〜五頁)という性格を担う。

その薫が参議になった翌年に関係することになるのが、「世に数まへられたまはぬ古宮」(橋姫・一一七頁)、すなわち八の宮である。もともと若年にして外戚の後見を失った八の宮に心を寄せる者としてなく、早くから八の宮は「つれづれ」を紛らわすために楽道に精進していた。ところが、「あさましうあてにおほどかなる」(同・一二四頁)というおっとりとした性格が災いして、右大臣家に東宮候補

として奉戴されたために、光源氏が明石から帰還すると、「公私に抛りどころなくさし放たれ」たようになってしまふ(同・一一七頁)。それでも、都の「広くおもしろき」邸宅とは別に宇治に風情のある山荘(「よしある山里」)も持っていた八の宮は、「をりをりにつけたる花紅葉の色をも香をも、同じ心に見はやしたまひしにこそ慰むことも多かりけれ」(同・一二〇頁)とあるように、北の方と四季折々の風物を共に眺めることで心の鬱屈を晴らしたのである。けれども、このような八の宮のもとから、時勢に敏感な家司や女房などが次々と離散し、あまつさえ「うき世の慰め」である最愛の北の方さえ失ってしまう。幼い姫君達を除いて孤立無援となった八の宮は、姫君達が絆となつて出家もままならず、「心ばかりは聖」(同・一二二頁)となつて都の自邸で勤行に励むことになる。こうした経緯と、八の宮自身が「ただ、厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勧めおもむけたまふやうなるありさまにて、おのづからこそ」(同・一三三頁)「心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべき」(同・一二七頁)と語っていることを考え合わせるならば、八の宮にとっての仏道とは、「世俗的な零落へのはかない主

観的な対処⁽²⁾、すなわち、北の方なき世の心の憂さを晴らすという面が強い。更に、いよいよ光源氏一族の世へと進む中で「あなたさまの御仲らひ」に「さし放たれ」た八の宮は自邸までも焼失し（橋姫・一二五頁）、政治的にも経済的にも都に宅地を求める力のない八の宮は宇治に隠棲することを決意する。

こうして宇治の山荘へ移った八の宮にとつて、本来は心慰められるはずの「花紅葉、水の流れ」も今は「ながめ」を誘発するほかに、「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひ尽きせぬ世の中の憂さ」（古今・雑下）という憂愁を抱える。この八の宮の山荘の対岸には「椎本」巻で匂宮が訪れる「いと広くおもしろ」き夕霧の別荘が位置していた。夕霧の別荘は光源氏から伝領したものであるが、源氏方と対極的な状態に置かれた八の宮は、娘の姫君達との管絃の遊びを除いて仏間に籠る日々を送る。しかし、八の宮にとつて、美しく成長していく姫君達の存在が「明け暮れの御慰め」（橋姫・一一九頁）となっていたのである。「経を片手に持たまうて、かつ読みつつ唱歌もしたまふ」（同・一二四頁）という八の宮の姿は、愁いを払うために「聖」を志向しつつも、同時に姫君達が憂き世の慰めであり、かつ絆でもあった「俗聖」の有り様を端的に示している。この八の宮の宇治での仏道の師が、「才いとかしこくて、世のおほえも軽からねど、をさをさ公事にも出で仕へず籠りあたる」（同・一二七頁）阿闍梨である。宇治の山寺に籠る「聖だちたる」阿闍梨は俗世との関係を全く絶ったわけではなく、冷泉院のもとに親しく伺候して御経などを教示していたのであった。

薫は、冷泉院が女一の宮をこの上なく愛育するのに劣らず大切に扱われていたのであるが（匂兵部卿）、この阿闍梨と冷泉院の八の宮をめぐる会話が契機となつて、傍らに待する薫は八の宮の存在を知ることになる。鈴木日出男氏が指摘するように、「現実生活への絶望から道心を志す八の宮の生活が、同じく現実へ懷疑をいだく薫⁽³⁾の心をひきつけ、「俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに」（橋姫・一二八頁）と強い関心を抱かしたためである。

二

官位の昇進には目覚しいものがあるとはいえ、まだ年若い薫が八の宮に関心を抱いたのは、自身が物心ついた頃にはすでに母の女三の宮が剃髪し、勤行生活を送っていたその生活環境によるところもある。

入道の宮の御方に渡りたまふに、若宮も人に抱かれておはしまし、こなたの若君と走り遊び、花惜しみたまふ心ばへども深からず、いとはけなし。

宮は、仏の御前にて経をぞ読みたまひける。何ばかり深く思しとれる御道心にもあらざりしかど……（幻・五三二頁）

右の若君が薫で、入道の宮が女三の宮である。このような生活は、女三の宮が三条宮に移った後は更に徹底したものとなる（匂兵部卿）。けれども、「女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、……みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて……」（若菜上・七三頁）という女三の宮の氣質・特徴は、右の引用や、「はかもなくお

ほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはんことも難し、五つの何がしもなほうしるめたき」(匂兵部卿・二四頁)という勤行の内実にも反映している。

しかしながら、このような薫の生活環境は道心への間接的な因とはなれ、直接的な要因ではない。周知のように、薫は、幼少時に周りの女房達の話から自身の出生の秘密を薄々感知し、「法文などの心得まほしき心ざしなん、いはけなかりし齡より深く思ひながら、え避らず世にあり経る」(橋姫・一三一頁)と述べているように、幼少にして道心に目覚めている。とはいえ、母の女三の宮は、息子の薫を「親のやうに頼もしき蔭」(匂兵部卿・二三頁)と思い、薫も後年、「いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよすがに思したるが避りがたき絆におほえはべりて、かかづらひはべりつる」(夢浮橋・三八一頁)と語っている。故に薫は、世間の目を憚り、経文を自室に閉じ籠って習い読むようになる。つまり、薫は平素、都在住時の八の宮には及ばないにしても、秘かにそれに似た「俗聖」的な日々を過ごしていた。このような薫にとって、伊藤博氏が指摘するように、出家の志を持ちつつも姫君達がその絆となり、宇治で隠遁の日々を過ごす八の宮は、同じ愛を抱く先覚であり、かつ理想的な「俗聖」と思われたのであった。こうして、八の宮への対面願望が募った薫は宇治へ赴くことになる。

げに、聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなしことそぎたり。同じき山里

といへど、さる方にて心とまりぬべくのどやかなるもあるを、いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すこく吹きはらひたり。

(橋姫・一三二頁)

傍線部は「おほつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」(匂兵部卿・二四頁)という苦悩を幼少から抱え続け、「世の中をばいとすさまじく」(橋姫・一二八頁)思っている薫の荒涼とした心象である。

そもそも、光源氏の栄華の象徴である六条院に生まれ育った薫は、出生当初から光源氏から愛憎入り混じった感情で見られていたのであり、光源氏の後継者夕霧も柏木と女三の宮の一件を感知し、薫の出生の秘事についても気づいていたようである(柏木、横笛)。また、女三の宮は密通の露見により、薫が出生した直後に剃髪し、仏間の世界に籠ることとなっていた。すなわち、薫はそのきらびやかな外見とは裏腹に幼少時から光源氏方から排除され、かつ常に見られている状態にあった。厳しい見方をすれば、薫はそのような非日常的な仏間の世界にしかその存在を許されていないといえるであろう。この外面と内面の齟齬が、「元服は……おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまで華やかなる御身の飾りも心につかず」(匂兵部卿・二四〇五頁)「人となりゆく齡にそへて、官位、世の中のにほひも何ともおほえず」(権本・一九九頁)という薫の心情を生み、かつ常に監視されているという意識が、「心の奥多かりげなる」薫の「心深」さにもつながっているとみられる。

このように六条院の仏間の世界で育った薫にとつて、源氏方から排除された八の宮の仏間の世界はなじみやすいものであったのであり、八の宮に同情の目も向けている。

いとあてに心苦しきさまして、のたまひ出づる言の葉も同じ仏の御教へをも、耳近きたとひにひきませ、いとよなく深き御悟りにはあらねど、よき人はものの心を得たまふ方のいとことにものしたまひければ、やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに、常に見たてまつらまほしうて、暇なくなどしてほど経る時は恋しくおぼえたまふ。

(橘姫・一三四頁)

最初の傍線部に「いとあてに」とあるのは、「容貌いときよげにおはします宮なり。年ごろの御行ひに瘦せ細りたまひにたれど、さてしもあてになまめきて」(同・二二二―三頁)とも語られるように、勤行の成果によつて生来の気品が増したことになる。植田恭代氏が指摘したように、薫は八の宮の「高德であることだけを評価してはいない」のであり、「八宮に好感を覚えたのは、その品格に魅力を感じたからである」。すなわち薫は、「聖」ではなく、「俗聖」としての八の宮に惹かれたのである。李相境氏は、八の宮が「聖」として俗世間に生きながら、もつとも俗世間のことを気にかけて人であった」とし、それは皇族の血統を引き継ぐものとしての「体面意識と親心」によるものであるとする。この八の宮に対して、女三の宮が絆となり、「現世への執着と現世からの離脱という二つの観念を、ともに志向しようとする」薫も強く心惹かれたのであった。すなわち、一方で頭中将に連なる笛の名手であり、また一方で秘かに勤行

に励むという「俗聖」的な生き方をする薫にとつて、琴の琴の名手であり、謙虚に身近な例に喩えて経文の意味を説く気品あふれる八の宮は、薫の理想的な師なのであった。しかし、やはり根底的には、志賀あずさ氏が「八の宮の道心と薫の道心は、自らは望まぬ周囲との不調和と疎外感から、別の価値体系によつて自分の存在意義を見つけようとする、そうした救いの手段であるという共通点」をもつと指摘しているように、日常世界から疎隔された両者は「聖」の世界にその存在価値を見出すしかなかったのである。こうして薫と八の宮は「仏をしるべにて、後の世をのみ契りし」(蜻蛉・二三〇頁)という関係が続け、三年が経過することになる。

六条院の仏間の世界に育ち、血筋的には藤原氏に属する薫は、常に日常世界に確かな足がかりをもつことはできない。これに加え、薫が琴を奏でた際に玉鬘がとつた「この君は、あやしう故大納言の御ありさまにいとようおぼえ、琴の音など、ただそれとこそおぼえつれ」とて泣きたまふ(竹河・七二頁)というような反応にもしばしば遭遇したとみられる。すなわち「薫は人々の言外に常に、自らの出生の秘密へのざわめきを感じつつ、それを言葉にできずに息を凝らし、耳を澄ま」す薄氷を踏むような生を宿命づけられている。清水好子氏は、薫は出生の秘密が漏れれば世上の糾弾にあらうとしたりした上で、「薫の状態は客観的にも恐ろしい不安なものである。彼の道心はその様な自分の運命の弱点から発している」と指摘している。また、尼姿の母をもつ等の欠如を抱える薫について志賀あずさ氏は、「恵まれた境遇に盲目的に身をまかせるには、あまりに現

世的に欠如の多いことを自覚せざるを得ない薫」は、「欠如感によつて生まれる憂愁からの救いの手段として、現世とは別の価値：仏道を選んだ」と述べている。すなわち、薫にとつて八の宮との勤行は、心理的な憂愁や不安を払う直接的な行為とみなすことができ

る。この源氏ならざる源氏として生きねばならない宿運を背負う薫が、公務多忙により久しい間宇治を訪れなかつた際の心情は次のように語られている。

入りもてゆくままに霧りふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱る木の葉の散りかかるもいと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかる歩きなども、をさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろきわが涙かな
(橋姫・一三六頁)

右の訪問時に、八の宮は四季ごとの念仏会のため山寺に参籠していたのであるが、それを知らぬ薫は宇治の八の宮山荘に赴く高揚感も手伝つて宇治の霧の景が「をかし」と感じられる。と同時にこの霧は、「霧りふたがりて」とあるように、久しく八の宮に会つていないことから生じる鬱屈した心の象徴でもあり、荒々しい風が吹きつけるにつれてはらはらと乱れ散る木の葉の露がそのまま薫の涙と重ねられ、薫の「いと冷やか」で「心細」き心象を形成している。この道中で、仏道に打ち込んでいることを知られたくない薫は、山里

に住む人々を起こさぬように音も立てずに通り過ぎる。しかしこの時、薫を特徴づける芳香は風に乗つて寝入つていた人々を起すほどとなる。薫到着後の八の宮邸が、その芳香で「うたてこの世のほかの匂ひにやと、あやしきまで薫り満ち」(同・一四四頁)、宿直人が賜つた薫の狩衣に染み付いた芳香が濯いでも取れないほどの「いとむくつけき」までの香りとなつていることは、薫の心の闇の深さと軌を一にしていると思われる。

この後、柏木の乳母子である弁と対面した薫は、周囲の女房などの存在を気づかう弁のおぼろげな昔語りからではあるが、年来の疑念であつた柏木と自己とのつながりを確信する。大きく動揺し、物思いにふけた薫は、供人達の次のような会話を耳にする。

宿直人がしつらひたる西面におはしてながめたまふ。

「網代は人騒がしげなり。されど水魚も寄らぬにやあらん、すさまじげなるけしきなり」と、御供の人々見知りて言ふ。あやしき舟どもに柴刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに行きかふさまどももの、はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごととなる世の常なきなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かはと思ひつづけらる。(橋姫・一四九頁)

寒々とした宇治の網代の様子は、「すさまじげなる」薫の心象へと転化し、「水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつ」(『紫式部日記』)さながらに、「はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごととなる世の常なきなり」という薫の内省を導く。このような体験は須磨で光源氏に貝類を献上した海人が様々な身の

上の不安を憂えたことに対して、光源氏が「心の行く方は同じこと、何かことなるとあはれに見」たことと照応している（須磨・二一四頁）。すなわち、須磨流離で光源氏が官位を剥奪されて自身を「いたづら人」と認識したように、薫も弁の昔語りによって、自己の存在の基盤の崩壊を自覚する。更に「玉の台に静けき身と思ふべき世かは」という薫の感懐は、『新編全集』が指摘するように、夕顔の世を忍ぶ郎を見た光源氏の「玉の台も同じことなり」（夕顔・一三六頁）という無常観と響き合っている。このような苦悩を抱える「孤児同然」の光源氏はやがて瘡病にかかり、北山の聖の「室」

（峰高く、深き岩の中）で看経をして過ごすことになるのである（若紫・一九九〜二〇一頁）、これに対して、前述のように、薫も出生の秘事による苦悶を要因とし、「かく絶え籠りぬる野山の末」（橋姫・二二六頁）に位置する宇治の八の宮邸を訪れて経文の意味などを学んでいる。更に、「若紫」巻と「橋姫」巻の垣間見の場面が『伊勢物語』「初冠」段をふまえていることを考え合わせるならば、薫の宰相中将期の宇治行と、光源氏の中将期の北山行に至る経緯との類似性も認められるように思われる。すなわち、「かう世離れたる所」（権本・二七一頁）という異郷の世界⁽¹⁶⁾において、宰相中将薫は、光源氏の中将期の北山行や、宰相兼大將期の須磨流離を止揚したような体験をしたとみられる。このような苦難を経て薫は中納言となり（権本）、光源氏は権大納言へと昇進するのである（明石）。「源侍従とて、いと若うひはづなり」「その昔は若う心もとなきやうなりしかど」（竹河・一〇六頁）と捉えられていた薫は、宰

相期の宇治訪問を経て「いとどあらまほしうねびととのひ、何ごとも後れたる方なくものしたまふ」（同・一一一頁）と語られる人物へと変貌する。それは「宿木」巻の次の語り手の評言からも証される。

この君しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづきたてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思ひ澄まして、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そめたまひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさまことなりけりと心苦しく思されて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情をもならひたまひにける。（宿木・四四二頁）

具体的には、薫は、弁の昔語り起因する網代の「ながめ」が転機となつて、帰京後に、八の宮邸の「宿直人が寒げにてさまよひしなどあはれに思しやり」（橋姫・一五一頁）、宿直人に檜破子の類を沢山贈っている。また後に大君の女房達が薫の人柄を「御ありさまはひのなつかしく情深う、……思ひやり多かる御心ばへ」（総角・三四〇頁）と慕っているように、以後の薫は「思ひやり」をもった人物として描かれることになる。渡辺仁史氏は、須磨流離における光源氏の精神的な転回として「思ひやる」態度を指摘しているが、右のような薫の変貌は、光源氏の須磨流離における転回と軌を一にするものといえる。

しかしながら、網代を「ながめ」た薫の上に最も重苦しくのしかかっていたのは弁の昔語りであり、帰京後に匂宮に「しばし世の中に心とどめじ」（橋姫・一五五頁）、すなわち、「我は世を捨て度と也」

〔孟津抄〕と語っている。後にも弁に「おぼえなき御古物語聞きしより、いとど世の中に跡とめむともおぼえずなりにたりや」（椎本・二〇〇頁）と述べているのも、極端にいえば不義の子である我が身を消し去りたいという厭世観を物語っているように思われる。

この薫と匂宮の会話の直後に、「をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり」（橋姫・一五五頁）と、世間一般の色恋沙汰に無関心になってしまふ木石の如き薫の異常性が語られている。これは、「身を思ひ知る方ありて、ものはれになどもありければ、心にまかせてはやりかなるすき事をさをさ好まず」（匂兵部卿・二九―三〇頁）という薫の若年からの性向が再び強く喚起されているのであり、薫の出離志向は内心では強烈なものになっていたのである。こうした状態で、四季の念仏から八の宮が戻ってまもなくの十月初旬に薫は宇治を訪問することになる。

暮れぬれば、大殿油近くて、さきざき見さしたまへる文どもの
深きなど、阿闍梨も請じおろして、義など言はせたまふ。うち
もまどろまず、川風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音、
水の響きなど、あはれも過ぎて、もの恐ろしく心細き所のさま
なり。

（橋姫・一五六頁）

ここでは最初の宇治訪問時の「げに、聞きしよりもあはれに……いと荒ましき水の音、波の響きに……すく吹きはらひたり」という情景が、右の「川風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音、水の響きなど、あはれも過ぎて、もの恐ろしく心細き」情況へと深刻化

している。今回の宇治訪問に際して供人が冬の風物である「網代をこそ、このごろは御覽せめ」と勧めたのに対し、薫が「朝に生まれ暮に死ぬる虫」（倭名抄）である「蜻（蜉蝣）」にわが身を寄せて「何か、その蜉蝣にあらそふ心にて、網代にも寄らん」と目をそむけるような発言をしているのも（橋姫・一五六頁）、弁の昔語りにより危うい身の上を自覚したことによる。このような薫にとつて、秋山虔氏が指摘するように、「八宮とともにする法の道こそ、いよいよそしまねばならない大道にほかならなかつた」のである。ところが、心の闇の深まった薫には「いとよなく深き御悟りにはあらぬ八の宮では対応しきれず、その師の「聖だちたる」阿闍梨が向かいの山寺から要請され、薫は経文に没頭する。更にこの後に行われた八の宮の琴の琴の演奏も、八の宮の心情と呼応するかのよう

に薫に「いとあはれに心すこし」と感じられている。八の宮においても、北の方を失って「独りとまりて、いとどすさまじくもあるべきかな」（橋姫・一一八頁）という感懐が、「年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな」（『紫式部日記』）さながらに、右の八の宮邸をとりまく心象風景となり、その心象風景を媒介として薫との共感関係を形成している。

更にこのような八の宮の心情と関連して注目されるのが、冷泉院の存在である。前述のように、阿闍梨の報告によつて八の宮の現状を知った冷泉院は、「俗聖とか、この若き人々のつけたなる、あはれなることなり」（橋姫・二二八頁）と同情する。この後まもなく八の宮へ送った手紙においても冷泉院は、「あはれなる御住まひを

人づてに聞くこと」と重ねて同情を示した上で、「世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲を君やへだつる」と、厭世の心は宇治山荘の八の宮の心と通っていると詠んでいる(同・一二〇頁)。また、弁の昔語りによって不義の子であることを確信した薫の「いと荒ましきに……あはれも過ぎて、もの恐ろしく心細き」という、右の引用にみられるような心象も、僧都から出生の秘密を打ち明けられた冷泉院が、「恐ろしうも悲しうも、さまさまに御心乱れ」、光源氏にそれとなく「世は尽きぬるにやあらむ。もの心細く例ならぬ心地なむする」と語っていることと照応する(薄雲・四五―三頁)。伊藤博氏は、罪の子としての冷泉院の内面の課題の追求を薫に担わせているとしているが、以上に見てきたような薫の霧に閉ざされたような孤独な心情を通して、それ以上の苦悩を抱えていたとみられる冷泉院の心情を透かし見ることができるようと思われる。高木和子氏は、「冷泉帝は薫の出生の秘密を実は察知しており、自らの不義の子としての複雑な内面を薫に託し、その人生を自らと双子のように、陰画のように見ている、だからこそ溺愛するのだと考える余地はないのだろうか」と指摘している。薫・八の宮・冷泉院という「俗聖」の世界は、それぞれ何らかの形で非源氏方の世界に連なっているものであり、以上のような薫の宇治訪問をめぐる一連の描写は『源氏物語』正編に時間的には連続しつつも、同時に立体的に光源氏の栄華の裏面を描いているとみられる。しかし、光源氏の薫に対する処遇には、光源氏の深慮と優しさも看取することができる。

見てきたように、薫は三年ほど八の宮の宇治山荘で仏道に励んだ

のであるが、「いと荒き山越え」(浮舟・一一七頁)を押し進む宇治への道程は、『うつほ物語』の主人公仲忠の北山行を髣髴とさせる。仲忠は北山の「いみじき尾を五つ越え」て到達した「世離れて」たうつほで琴の修練に励むとともに出家の一手前前の生活を送り、生来の光りはその輝きを増す(俊蔭)。これに対して宇治に赴いた薫は、「かう世離れたる所」と語られる異郷の世界での仏道修養の結果、その笛の音が「これは澄みのほりて……」(稚本・七一頁)と八の宮が感じるような澄んだ音色となり、かつ「いとまばゆくにはひ満ちて」(同・一九六頁)と語られるようになる。自身も後にこの頃の心境を、「昔の人に心をしめてし後、おほかたの世をも思ひ離れてすみはてたりし方の心」(宿木・三八七頁)「やうやう聖になりし心」(蜻蛉・二五一頁)と回顧している。薫の芳香については後に女房が「経などを読み、功德のすぐれたることあめるにも、香のかうばしきをやむごとなきことに、仏のたまひおきけるもことわりなりや。葉王品などにとりわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、……かの殿の近くふるまひたまへば、仏はまことしたまひけりとこそおほゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくしたまひければよ」(東屋・五五頁)と述べている。「匂兵部卿」巻の冒頭に、「光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり」とあるように、薫は出生時から絶対的な主人公として位置づけられているわけではない。しかし、体から発する「香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず」(同・二六頁)という特徴をもっていた。元来「かをる」は霞などがけむつ

ていることを意味する言葉であつたとみられるから、薫の鬱屈した心情を含蓄する原義的な「かをり」が、幼い頃からの勤行の成果によつて芳香を意味するように変化したのではないだろうか。⁽²⁾そして、宇治訪問で仏道に打ち込んだことによりその芳香も一層増したと考えられる。

しかしながら、阿闍梨・八の宮とともにまどろみもせず経文の意味を学んだ後に、弁から出生の秘密をはつきりと聞いた薫は、両親の恋文を目的の当たりにした衝撃により「内裏へ参らんと思しつるも出で立たれず」（橋姫・一六五頁）という状態に陥る。一人物思いにふける日々が続いた薫の宇治訪問も久しく途絶え、中納言任官の後ですらその心情は全く冷え冷えとしたものとなる。すなわち、母女三の宮を思い、あくまでも都にふみとどまり、仏道に打ち込むことを通して「俗ながら聖にな」ることを志向するなら、薫はその憂愁を完全に払うことができない。ここに、「さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてな」すような女君（総角・二三〇頁）、つまり八の宮における北の方や姫君のような存在が要請されることになる。

三

そもそも薫は前述の冷泉院と阿闍梨の会話を傍らで聞き、次のような話も耳にしていた。

さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、川波に競ひて聞こえはべる

は、いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と古代にめづれば、……（橋姫・一二九頁）

ここで言及されている八の宮の姫君達の「極楽思ひやられ」るような演奏が「俗聖」を志向する薫の関心を引いたとみられる。この後宇治を訪問した薫は、宇治の荒涼とした情景を見て、「聖だちたる御ためには、かかるともこそ心とまらぬもよほしならぬ、女君たち、何心地して過ぐしたまふらん、世の常の女しくなよびたる方は遠くや」（同・一三二―一三三頁）と、一方で八の宮を想起するとともに、もう一方で自身と同じように勤行生活に明け暮れる親を持ち、「俗聖」的な日々を送る姫君達へ同情の心を向ける。宇治の山荘に到着後、八の宮の仏間に通された薫は隣室の姫君達への関心を抑えられなくなるが、それでは本意に違ふとその気持を押さえつけ、三年の間、師八の宮と親交を続ける。

その薫が、姫君達に再び関心をもつようになったのは、八の宮が四季の念仏のために山寺に籠つた折の、前掲の薫の霧の山行に続く名高い垣間見の場面からである。

あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば、月をかきほほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く捲き上げて人々あたり。……内なる人、一人は柱にすこしひ隠れて、琵琶を前に置きて、撥をたまさぐりにしつゝあたるに、雲隠れたりつる月のにはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげににほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、

琴の上にかたぶきかかりて、「入る日をかへす撥こそありけれ、さまざまも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。「およばずとも、これも月に離るるものかは」など、はかなきことをうちとけのたまひかはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。……げにあはれなるもの限ありぬべき世なりけりと心移りぬべし。

霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。

(橋姫・一三九〜一四〇頁)

後に中の君は、宇治での日々を「世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人」ところを頼みきこえさせて、さる山里に年経しかとど、いつとなくつれづれにすこくありながら……(宿木・四〇三頁)と回顧しているが、姫君達が頼りとする八の宮は向かいの山寺に参籠中である。それを知らない薫が宇治山荘に近づくにつれて、薫の心の闇と呼応するかのように、八の宮不在に起因する姫君達の「すこげ」な合奏が聞えてくる。これを琴の名手八の宮の演奏と受け取った薫は、よい機会だと思ひ聞き耳を立てる。その音色について薫は、「椎本」巻で「さかしう聖だつ迦葉も、さればや、起ちて舞ひはべりけむ」(一一八頁)と述べている。更に薫が近づくにつれ、琵琶の音色が「ものきよげにおもしろし」と感じられ、箏の琴の音色が「あはれになまめいたる声」と受け取られたことを契機として、今まで薫が姫君達に対して抱いてきた「いと世づかぬ聖さまにて、こちごちしうぞあらん」という推量は一変する(橋姫・一三

七、一五四頁)。すなわち、薫は、自身と同じように不安な思いを抱える「俗聖」的な姫君達に強い関心を抱いたのである。そして、それは右の垣間見によって具体的な関心へと大きく展開していく。

右の引用の点線部の「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」という中の君の言葉は、諸注指摘するように「和漢朗詠集」の「月重山に隠れぬれば、扇を撃けて之に喩ふ。風大虚に息みぬれば、樹を動かして之を教ふ」(下・仏事)をふまえる。この月を八の宮とみなすならば、中の君は八の宮思慕の心を明白に示し、他方の大君は、これに「入る日をかへす撥こそありけれ、さまざまも思ひおよびたまふ御心かな」と応じる。これは「奥入」に「還城楽陵王をあやふめむとすひのくる、にはちして日をむまにかきかへすといふ事也」と注する故事に従って、その日でもあるまいに、と大君が事態を静観している言葉とみられる。しかしながら、両者ともに八の宮不在の不安感から「ながめ」ているのであり、その心象の深い霧が、ここでは薫の心象ともつながって共感を呼んでいる。右の「心移りぬべし」という語り手の評言は、予想に反して昔物語の姫君のような姉妹を目にした薫の心中を推測しての言であり、帰京した後には薫は、「御けはひども面影にそひて」(橋姫・一五一頁)とあるように、姫君達の面影が身を離れなくなってしまうのである。

この垣間見で、まず「いみじくらうたげににほひやかなるべし」と推測された中の君の容貌は、「容貌なむまことにいとうつくしう、ゆゆしきまでものしたまひける」(同・一一九頁)という異常出生以来の一貫した特徴である。八の宮によって「おほどかにらうたげ

なるさまして、ものづつみしたるけはひにいとうつくしう」(同・一二二頁)と捉えられ、「総角」巻でも「御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに、いとをかしくはなばなとして」(三一頁)と語られる、「山桜」のような美しさをもつ中の君は、二条院に引き取られていることが示しているように、「いとにほひやかにうつくしげ」「なつかしうらうたげ」(桐壺・二二、三五頁)と形容される桐壺更衣に由来する母なるものの後継的な人物造型がなされている。しかし、薫は、二度目の垣間見の際に「かたはらめなど、あならうたげと見えて、にほひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一の宮もかうさまにぞおはすべきと、ほの見たてまつりしも思ひくらべられて、うち嘆かる」(榊本・二一七、八頁)と慨嘆しているように、中の君自体に執着しているというよりも、中の君を六条院の女一の宮を偲ぶよすがとしている。また、中の君の父八の宮も「このわたりに、おほえなくて、をりをりほめく筆の琴の音こそ、心得たるにやと聞くをりはべれど」(橋姫・一五八頁)と、筆の琴に中の君を重ねて薫に注意を喚起するような発言をしている。

これに対して注目されるのが、右の垣間見で薫は大君を中の君よりも「いますこし重りかによしづきたり」と捉えていることである。八の宮も幼い大君に琴を教えた際にその様子を「らうらうじく、深く重りか」(同・一二二頁)と見ていた。また、「榊本」巻の薫の二度目の垣間見の際には、大君は周りの「何心な」女房や中の君と異なって薫に見られているのではないかと用心し、その様子が「うちとけたらぬさまして、よしあらんとおほゆ」と語られ、また「中

の君よりも) いますこしあてになまめかしさまざりたり」「なつかしうなまめきて、あはれげに心苦し」「気高う心にくきはひそひて」などと捉えられている(二一八頁)。「総角」巻でも「あてに限りなく見えたまふ。……なまめかしさまざりて」(三一頁)と語られる、大君の「なまめかし」「あて」という美質は、「あてになまめきて」「いとあてに心苦し」などと語られる八の宮の気品を受け継ぐものであり、「東屋」巻では中の君が「故姫君は宮の御方さまに……似たてまつりたるところは、古人ども言ふなりしか」(七三頁)と回顧している。すなわち薫より年長の大君は八の宮の形代的な意義をもつとみられる。更に中の君によって「故姫君の、いとしどけなげにものはかなきさまにのみ何ことも思しのたまひしかど、心の底のづしやかなるところはこよなくもおはしけるかな」(宿木・三八四頁)と偲ばれる大君の「重りか」で容易に心を許さない性格は、女三の宮の、

かかること、世にまたあらんやと、心ひとつにいとどの思はしきそひて、内裏へ参らんと思しつるも出で立たれず。宮の御前に参りたまへれば、いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを、恥ぢらひてもて隠したまへり。何かは、知りにけりとも知られたてまつらんなど、心に籠めてよろづに思ひるたまへり。

(橋姫・一六五、六頁)

という様子と好対照をなしている。右は柏木と女三の宮の恋文を読んで憂悶に耐えられなくなった薫が思い余って三条宮を訪ねた場面である。波線部は冷泉帝が僧都から出生の秘密を知った際の「さき

ざきのかかることの例はありけりや」(薄雲・四五五頁)という冷泉帝の苦悶と照応するが、薫はこの女三の宮の姿を見て、柏木との一件については母を煩わせず自分の胸のうちにしまっほかはないと観念する。その孤独感を薫は、「はらからなどのさやうに陸まじきほどなるもなく、いとさうさうしくなん、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心にこめてのみ過ぐる身」(総角・二三〇頁)と述べている。薫自身、続けて「三条宮は、親と思ひきこゆべきにもあらぬ御若々しきなれど、限りあれば、たやすく馴れきこえさせずかし」(同・二三一頁)と語っているように、自身を親のように頼りにしている女三の宮は、薫にとつて絆とはなれ、憂き世の慰めとはなりにくかつたとみられる。女三の宮はその登場以来、右の引用の傍線部に見られるような幼さと何心なきが強調されているが、夕霧は当初から女三の宮を「をさをさげざやかにもの深くは見えず」(若菜上・一三三頁)と捉え、女三の宮が柏木にその姿を見られたことにより「軽々し」と「思ひおと」していた(同・一四三〜四頁、若菜下・二五九頁)。更に、女三の宮は密通後まもなく「深き心もおはせねど」(若菜下・二三〇頁)と評され、光源氏も「かくあさへたまへる女」(幻・五三一頁)とみなしていた。

柏木と女三の宮の罪の結果としての自己の存在を「恥づかし」と弁に語る薫は、この女三の宮と対極的に、「深く重りか」で、容易に心を許さない大君を垣間見し、直感的に結婚相手として最適だと感じたのではないだろうか。もともと薫は、「心にしむ」相手がい

ないので、出家の絆となる女性交渉が遠慮されるのだろうと推測されていた(匂兵部卿)。両親の密通が念頭から去らない薫は、明石の中宮といった縁者を除いた世の女性が「すべていと疎く、つましく恐ろしく」思われ、「心からよるべなく心細きなり」と弁に打ち明けている(総角・二三二頁)。後に大君に対して「心軽うてなびきやすなるなどを、めづらしからぬものに思ひおとしたまふにやとなむ、聞くこともはべる」(権本・二〇七頁)と匂宮にひきかけて自身の女性観を吐露した薫は、大君に共寝を含蓄する懸想の歌を詠みかけるが、その際の大君の反応を「今様の若人たちのやうに、艶げにももてなさで、いとめやすくのどやかなる心ばへならむとぞ、推しはかられたまふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれ」と思ふに違はぬ心地したまふ(同・二一〇頁)と感じ入っている。そして、自身と恋愛関係にある大君を「軽々しく異ざまになびきたまふこと、はた、世にあらじ」(総角・二八八頁)と信頼するのである。この「限りなき御心の深さ」(権本・一九七頁)の持ち主である大君に薫は、「有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆく」(総角・二三六頁)ようになり、「本意の聖心はさすがに違ひやしにけん」(宿木・四四六頁)と述べるほど心を奪われたのであった。更に、「夕霧」巻の落葉の宮と夕霧の霧の場面を考え合わせるならば、すでに幼少から「おとなおとなしく」(竹河・六三頁)、自然と老成せざるをえなかった(「おのづからおよすけたる心ざま」、薫の恋の形が大君への恋であるともいえよう。後に御簾の中に押し入った薫は大君に、「何とはなくて、ただかや

うに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき（綵角・二三七―八頁）と述べているが、八の宮と親交する一方で「俗聖」的な大君と結ばれることで、薫は「いぶせかりし霧のまよひもは」らそうとしたのである（橋姫・二五一頁）。

後に大君の妹の中の君は、「いと盛りのにほひ多くおはする人の、さまざまの御もの思ひにすこしうち面瘦せたまへる、いとあてになまめかしき気色まさりて、昔人にも……ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへる」（早蕨・三四七頁）と、「面瘦せした梅花のような美しさが大君と通うようになり、大君の形代的に薫に恋慕されるようになる。その大君は、紅梅というよりも白梅の美しさをもつ女君とみられるが、大君と薫は、前掲の薫の最初の垣間見の後に次のような歌を詠み交わしている。

かのおはします寺の鐘の声かすかに聞こえて、霧いと深くたちわたれり。

峰の八重雲思ひやる隔て多くあはれなるに、なほこの姫君たちの御心の中ども心苦しう、何ごとを思し残すらん、かくいと奥まりたまへるもことわりぞかしなどおほゆ。

あさほらけ家路も見えずたづねこし楨の尾山は霧こめてけり

心細くもはべるかな」とたち返りやすらひたまへるさまを、都の人の目馴れたるだになほいと思ひきこえたるを、まいていかがはめづらしう見ざらん。御返り聞こえ伝へにくげに思

ひたれば、例のいとおつましげにて、

雲のゐる峰のかけ路を秋霧のいとど隔つるころにもあるかな

すこしうち嘆いたまへる気色浅からずあはれなり。

（橋姫・一四八頁）

この直前の弁の昔語りによつて出生の秘密を確信した薫の煩悶した心を晴らすことのできる八の宮は、「峰の八重雲」の隔ての向こうに参籠中である。その自覚によつて心の霧の深まった薫の「あはれ」な心が自ずと八の宮を慕う姫君達の心情を想起させる。ここで薫は、身も心も霧に閉ざされたような自分は帰ることすらできないと、大君への恋にまどう気持も忍ばせて、贈歌とも独詠ともとれる歌を詠む。これに対し、簾越しに薫の姿を認めて少なからず惹かれたと思われる大君が、薫の大君恋慕の心を自身の八の宮思慕へとずらし、「雲」「霧」と畳みかけることでその不在を嘆く。この様子を「あはれ」と見る薫は、心象の霧や雲を媒介として大君の孤心との共感を形成している。小西甚一氏は、匂宮の紅梅に対して薫が白梅に配されていると指摘しているが、ともに白梅に擬えられる薫と大君の恋は緒についたばかりなのであった。

四

見てきたように、「俗聖」を志向する薫が関係する人々は、濃淡はありつつも何らかの形で非日常的な世界と結び付いていた。しかし、この非日常的な世界は、いわゆる神祭の場における（聖）と対

極的な価値に基づく世界であるとみられる。すなわち、宇治十帖で薫の関わる神祭の場面が描かれていないことが示唆しているように、〈聖〉—〈俗〉—〈遁世〉—〈聖〉の世界」という図式において、薫は源氏ならざる源氏としての立場から、そのような共同体の統合をもたらす〈聖〉なる世界から排除されており、その実質的な行動範囲は、〈俗〉から〈聖〉の世界の間に限定されている。この間を、これまでの登場人物とその居住空間に着目して整理するならば、「聖だつ」阿闍梨の山寺の向かいに「俗聖」八の宮の宇治山荘があり、その八の宮邸の仏間の隣室に「俗聖」的な姉妹が暮らしている。薫の宰相期の宇治訪問においては、「若紫」巻の北山の「聖」のような人物は登場しないが、宇治の奥深くにはそのような「聖」の室があったことが想定される。すなわち、「聖」から「俗」の世界の間には、「聖」—「聖だつ」(「聖」的)—「俗聖」—「俗聖」的—「俗」という階層的秩序が成り立っている。しかしながら、剃髪した女三の宮を母とする薫は、当初から「俗」と「聖」の世界における安心立命も望み得ない。従って、幼少時から「俗聖」的な生活を送っていた薫は、その憂悶を深めるにつれ、宇治の八の宮を理想的な「俗聖」と仰ぎ、一方で「聖」的な方面へと没入し、また一方で「俗聖」的な大君との関係を築こうとする。その薫の期待は次のように語られている。

七月ばかりになりけり。都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、
音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺もわづかに色づきて、
なほ、たづね来たるに、をかしうめづらしうおぼゆる

(権本・一七八―九頁)

右は薫が中納言に任官してまもなくの宇治行であるが、音羽山の近くを通り過ぎる薫の心に呼応するかのように冷え冷えとした風の音が聞こえる。ところが以前には「霧こめてけり」と詠まれた槇の山が右では「わづかに色づきて」と肯定的に捉えられ、更に八の宮山荘周囲の紅葉の景が「をかしうめづらしう」と感じられている。すなわち、右の場面は八の宮と大君に会う期待感から、宇治に近づくにつれて徐々に薫の心が慰められていく様子が描かれているとみられる。「露けき道のほどに独りのみそほちつれ」(橋姫・一四五頁)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」(古今・春上・躬恒)という悲哀と翳りを抱える薫は、八の宮との親交と大君との恋に一筋の光明を見出したのであった。

けれども、盗賊も出没する木幡山を通る宇治への道程は実際、「心やすき男だに、往き来のほど、荒ましき山道」(宿木・三九八頁)であったのであり、匂宮が宇治に使者を派遣する際には物怖じしない者が選ばれたのであった(権本)。その末に薫が到達した宇治八の宮邸周辺は「かう世離れたる所」と語られる異郷的な地であり、この地での仏道修養の結果として薫の吹く笛の音は「澄みのぼるような音色となる。これは宗教的な深化を物語るものであるが、「橋姫」巻の「はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごとなる世の常なきなり」という宇治の網代の「ながめ」を通して、「朝夕の隔て知らぬ世のはかなさを人よりけに思ひ」知った薫は(権本・一九一頁)、以後「思ひやり」のある人物として描かれるよ

うになる。この薫にとって、人間としても政治家としても大きな転機となる異郷体験は、前述のように光源氏の異郷体験と軌を一にしているのである。

しかし、両者の異郷訪問はそのような共通性をもちつつも、光源氏の方は、後の罪の原因となる藤壺との恋により癡病にかかり、北山の「聖」のもとを訪れ、次第に道心を深めていくように描かれているのに対し、薫は、罪の結果として自己を捉え（事にふれて、わが身につがある心地する）、常に憂苦を抱え込みながら秘かに動行生活を送り、ついに「都の辰巳」の宇治へと赴き、垣間見を契機として大君への執心を募らせていく、というように光源氏とは対照的に描かれている。大君を母女三の宮と対極的な理想的な女君と見た薫は、大君が拒絶すればするほどその恋慕は募り、やがてその人形を求めていくことになるのだが、これも、ひたすら母の形代を求めていく光源氏の恋の有り方と対極的であるといえる。光り輝く「にほひ」（光源氏）と闇の「かをり」（薫）⁽²⁶⁾という対偶的な人物造型の有り方がここでも規範的に作用していると認められる。ただ、二人は、その成長とともにそれぞれ光りと香りを増していくという点では共通しており、その光りと香りの強さは心の闇の深さと表裏の関係にあるとみられる。

その薫の芳香は仏道修養とも密接な関係をもっていたのであるが、出離志向を強烈に抱える薫の宰相期の宇治行といえども、基層的な面に注目すれば、異郷世界での恋と試練を経て成長を遂げる、という大國主神の異郷訪問と通底するイニシエーション的な意義が認め

られる。しかし、神ならぬ人間として造型されている薫が、宰相期の宇治訪問を通して一挙に光源氏のような絶対的な存在へと変貌したかという疑問が残る。宇治十帖において主導的な地位にあった光源氏の子息夕霧が出生したのは「葵」巻であったが、その夕霧は光源氏による教育を経て、第一部最後の「藤裏葉」巻で初めて「常よりも光添ひて」（四四三頁）という表現が用いられる。「玉の男御子」として出生した光源氏と薫をつなぐ橋渡しの存在の夕霧は、磨けば光る玉とみられるが、宰相期の宇治訪問を通して薫もようやく夕霧に伍しうる力をつけてきたといえるだろう。けれども、更にこの後、薫は悲愴なほどの辛苦に見舞われ、その都度仏道へと傾斜する。しかし、これは必ずしも否定的なものではなく、薫が主人公にふさわしい資質（超越性）を帯びるのに必要不可欠な道程なのではないだろうか。その意味で薫は、光源氏や仲忠といった主人公と異なる「ただ人」がいかにしてそのような人物に比肩する主人公たりうるかという重い課題を背負っているとみられる。

注1 『源氏物語』等の本文の引用は新編日本古典文学全集による。

2 秋山慶「八宮と薫君―宇治十帖の世界、その一―」（『日本文学』五巻九号、一九五六年）

3 鈴木日出男「薫と大君」『源氏物語虚構論』（東京大学出版会、二〇〇三年）

4 伊藤博「薫論序説―柏木の影をめぐって―」『源氏物語の探究・第九輯』（風間書房、昭和五九年）

5 池田義孝氏は「宇治十帖の人間と自然」（『源氏物語の探究』（昭和四九年、風間書房）で、「その晴れやらぬ天象は此処に住み、此処に通う人間

- の心象なのである」と述べている。
- 6 光源氏は幼児薫に対し「よろづも知らず顔にいけなき御ありさまを見たまふにも、さすがにいみじくあはれ」(横笛・三四五頁)と見ていた。
- 7 植田恭代「薫・八宮の交流をめぐる――「法の友」の基底――」(『日本文学』三五卷十一号、一九八六年)
- 8 李相瓊「八の宮小考―「俗聖」としての生き方をめぐって―」(『国文学踏査』四号、昭和六十一年)
- 9 鈴木日出男「物語主人公としての薫」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会、二〇〇三年)
- 10 志賀あずさ「源氏物語の研究―薫と浮舟、その生」(松村緑記念基金刊行賞出版物第六冊、二〇〇二年)
- 11 高木和子「匂宮・紅梅・竹河の三帖における薫出生の秘事」(『京都語文』十七号、二〇一〇年)
- 12 清水好子「薫創造」(『文学』二五卷二号、一九五七年)
- 13 志賀あずさ 前掲書
- 14 薫にとって趣深く感じられる霧は、鈴木日出男氏が指摘するように(前掲論文注3)、大君・中の君垣間見への伏線としても機能している。
- 15 鈴木日出男「光源氏の登場」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会、二〇〇三年)
- 16 森岡常夫氏は、「宇治の大君論」で「人間的環境から言っても自然的環境から言っても、大君の住んでいるのは人里から離れた世界である。それは一歩地上を離れた世界であるとも言える」(『平安朝物語の研究』(風間書房、昭和四二年))と指摘している。
- 17 渡辺仁史「須磨流論―『源氏物語』第一部における光源氏の精神的転回点について―」(『日本文芸論稿』第十二号、一九八三年)
- 18 秋山虔「薫大将の人間像」『源氏物語の世界』(東京大学出版会、一九六四年)
- 19 伊藤博 前掲論文
- 20 高木和子 前掲論文
- 21 神野藤昭夫氏は、第二部で「まみのかをりて」などと描かれる薫の視覚的な(かをり)が第三部以降の嗅覚的な(芳香)へと転化あるいは重層化されているとする(匂と薫「匂宮・紅梅・竹河巻」『源氏物語講座・第四巻』(勉誠社、平成四年))。
- 22 匂宮の「山桜にはふあたりたつねきておなじかざしを折りてけるかな」という贈歌に対して、中の君が返歌を詠んでいる(椎本・一七四―五頁)。
- 23 安藤亨子「大君―俗聖の姫宮―」『源氏物語講座・第四巻』(勉誠社、平成四年)
- 24 小西甚一「源氏物語のイメージリ」(『国文学解釈と鑑賞』第三十巻第七号、昭和四十年)
- 25 薫と大君に対して、光源氏と紫の上はそれぞれ桜花を配されているとみられ、恋の関係にある理想的な男君・女君は一对の花に喩えられるのではないかと思われる。
- 26 小西甚一 前掲論文参照
- 27 東宮候補の匂宮(夕霧は六の君を娶えたのに対し、薫は中の君の後見者となっている(総角、宿木))
- (かとう・よしひこ 平成二十三年大学院博士後期課程満期修了)